

Photographic Society of

# Zone System

ゾーン・システム研究会会報

発行日：99' 5/20

発行者：中島 秀雄

編集部：

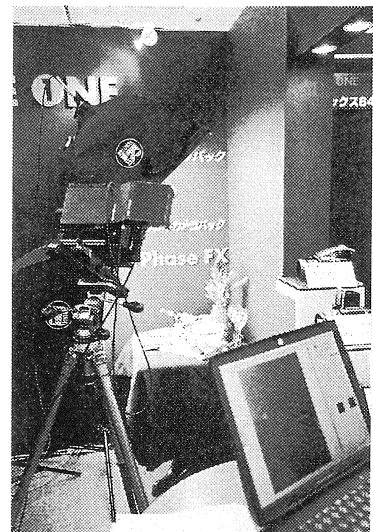
編集レイアウト：篠原 康之

内田順

vol.16

## CONTENTS

- ・ 2000 年を越えて
- ・ 東京写真文化館に決定
- ・ IPPF の展示で感じたこと
- ・ コントラスト可変型ペーパーの使い方
- ・ 蛇腹修理雑感
- ・ ゾーンシステム・テクニカルアドバイス
- ・ 講演会報告
  - アンセル・アダムス、芸術家、  
そして 推進者として -
- ・ information



## 2000年を越えて

早いもので、今年も5月を過ぎようとしている。

大きなトラブルもなく二千年を越え、大騒ぎした二千年問題はマスコミに少し振り回されたように思えてくる。ある航空会社は米国行き12月31日便にかぎって運賃は三万円と出していた。日付が変わる0時にコンピューターが狂いだし、行き先どころか操縦コントロールを失うかもしれないという心配から、その時間帯を避ける乗客が多く、席が十分埋まらないとの理由らしい。実際に何人乗ったか追跡した様子もないが、なにごともし過ぎてしまえば人々の関心は煙のように消えてしまい、日常のせわしない現実にはひきもどされていくこの落差が、私にはおもしろかった。しかし、二千年問題の一連の出来事は、全世界の人々にコンピューターの存在の大きさを改めて知らせることにとなり、それは時に支配し、時に支配されることを確認した出来事でもあった。

気ぜわしい一年の中にも自分を取り戻してくれる時間はあって、昨年のアダムス展は我々にプリントの魅力をたっぷり堪能させてくれるのに十分だった。またアダムスのプリントを研究する絶好の機会でもあって、会員の皆さんにはきっと多くの発見や気づきがあったことと思う。我々は、自らの表現のスタイルを前進させるためにも、アダムスが提唱したゾーンシステムを使った大型カメラが生み出すプリントの魅力に、もう一度立ち返って検証する必要がある。研究会の存在意義もここにあり、昨年はそのことを確認する年でもあった。

今年、そのことをはっきりさせる年だと考える。

## 東京写真文化館に決定

研究会は今年で6年目、展覧会も5回目が計画されている。以前から5回目は節目の年でもあり、今まで

と違うやり方で進めたいと思っていた。もっと大きな会場がいい、たくさんの作品を展示したい、照明にスポットライトが欲しい等、会員の様々な要望もあり、頭からそのことが離れなかった。

- ・我々の表現のスタイルを理解してくれるギャラリーはどこか
- ・意欲的に賛同してくれる担当者はだれか
- ・スペース、設備は十分か
- ・ギャラリーとしての知名度やポリシーは
- ・料金はどのくらいか
- ・販売は出来るのか
- ・駅から近いか

たしかに知名度や設備、スペース、そして駅から近いといったことだけで考えればギャラリーはたくさんある。しかし料金が高かったり、我々の写真に十分興味をもってもらえないかもしれない。まず我々が積み上げてきたやり方を理解してもらい、積極的に動いてくれるギャラリーを考えていた。そこに東京写真文化館が賛同してくれた。文化館は設立して数年と日はまだ浅いが、アダムスやウエストンといった、我々に強い影響を与え続けている写真家の作品展で多くの鑑賞者を擁していて、ギャラリーとして十分な場所だ。

文化館5階のイベントギャラリーは、スペースや壁面、照明も十分で我々が望んでいた条件を満たしてくれる。これらの交渉に事務局の内田さんが動いてくれた、内田さんの労に感謝します。

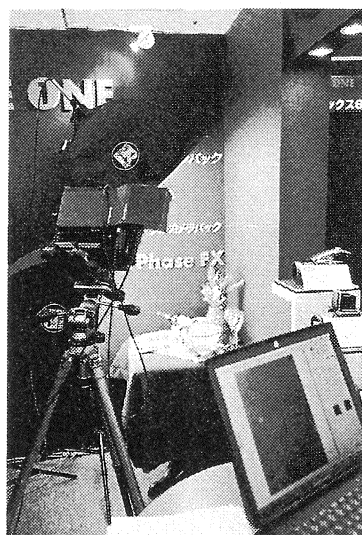
今回の展覧会の趣旨は、我々研究会が進めてきた表現のスタイルを総合的に見せることにあると考える。そこで4回展までの作品の中から印象に残る強いイメージの作品を60%くらい、今年の作品を40%くらいとし、毎回のようにすべての会員に展示するチャンスがある。また、イベントやワークショップを予定していて、行動することで我々の理念を伝えて行きたいと考えている。また以前から要望のあった展覧会リーフレットを作ることも計画していて、研究会の存在や作品の意味内容をより多くの人に伝

えたいと思っている。これは展覧会が終わっても記録として残り、後に利用できるのもありがたい。

今年の展覧会は、我々が求めている研究会の輪の広がりにつながる絶好の機会でもあり、皆様の協力と力作を期待しています。

中島秀雄

### IPPFの展示で感じたこと



毎年開かれるIPPFの展示に行ってみた。以前の展示と違ってアナログ系がすっかり姿を消し、どのブースもパソコンになってしまった。オペレーターが

[我が社こそ最速のパソコンとソフトをそろえている]とばかりに喋りまくっていた。私にはどれも同じように見えてしまい、悲鳴にしか聞こえなかった。ごく親しいメーカーの人に話を聞いた。「各メーカーが互いに競争していて、実は辛いんです。パソコンのスピードが少しでも遅いとすぐにクレームが来る、だからリスクがあっても今は最も早い機種を高価でも入れざる負えない」本音とも冗談ともとれる言葉がでてきた。私はデンマークのフェーズ・ワン社の製品に興味をもった。以前見たものより小型になり、ハッセルやマミヤに付けられるという。そして、なによりもクオリティーの高い画質に艶を感じたからだ。ついにカラーフィルムの画質にまで到達したと感じた。確かにこの画質には目を見張るものがあり、多くの見学者で賑わっていた。しかし、カラーフィルムに到達したからといってすぐにこの高度のデジカメに切り替わるとは思えない。この機器はこれだけでは可動せず、その周辺機器とソフト、そして、それを被り巻く環境を整備することではじめて有効になる。写真家、デザイン事務所、印刷会社、クライアント等、これらが整備されネットワークでむすばれてはじめて有効になる。この高度のデジカメは300万円を越えてしまう。今、手持ちの4x5カメラで一枚とっ

て現像すると、500円位で上がる。高度のデジカメに切り替えるとき、このリスクはだれが負うのか。

研究会の歩んできたこの5年間に、写真を取り巻く環境はずいぶん変わってきた。多くの人々が銀塩写真からデジカメに切り替えているからだ。しかし、デジカメで撮ったプリントに満足しているというよりも、新しい物に早くふれたいといういつもの日本人病が蔓延しているようにしか見えない部分もある。このまますっかりデジカメに移行してしまうのかわからないが、コンパクトカメラで満足していた人々はデジカメで十分なかもしれない。NHKのハイビジョンが公表されたのはもう何年前のことになるのか、私はすぐにもこのクオリティーの高いハイビジョンの時代が来るものと思っていた、しかし、いまだに軌道にのらないのは単にコストだけの問題なのか。

仮にハイビジョンを手に入れたとしても、番組内容のクオリティーが上がるわけではない。キメ細かで艶のあるハイビジョンで、毎日、嫌いなタレントの顔や暴力シーンを見るのは、生理的に合わないように思う。だとしたらいまのTVで十分ということになる。カメラも家族写真や旅行程度の記録なら今のデジカメで十分とすると、クオリティーの高いデジカメは不要ということになるのか。そうなると300万

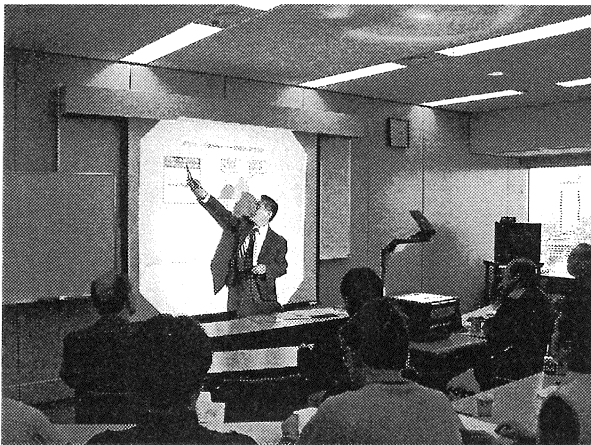
円もするプロユースのデジカメのコストは下がらないということになるのか。どんなにいい物でもすんなり受け入れられないのが世の中、デジタル技術そのものの利便性は高いが、個々の製品マーケットを見ると一般大衆の映像文化に対する意識しだいともいえそうで、実は、ここが少し心細くなるどころ。

中島秀雄



## コントラスト可変型ペーパーの使い方

田中 益男



はじめに

現在、B&Wペーパーの主流がコントラスト可変型(variableContrasttype)へと移行し、従来からの号数別ペーパーの利用度が減少の傾向を辿っている。この現象は、写真領域ではカメラレンズにも見られ、可変焦点く距離)レンズ(ズームレンズ)が多用され、単焦点く距離)レンズの利用が減少傾向にあるのと共通するものと言えよう。

ところで、本テーマの「コントラスト可変型のペーパー」は、嘗て小西六(現、コニカ)から「多階調吉野」というペーパーが市販されたが、近年、ILFORDの「Multigrade PaPer」が比較的廉価にて市場に登場、かつ時代の趨勢とマッチしたのか、現在ではMultigradeIV FB, Multigrade FB WARMTONE, Multigrade IV RCDELUXE AND PORTFOLIO, Multigrade RC WARMTONEを初め、KodakのPOLYMAX II RC・POLYCONTRAST III RC、富士のFIJIBRO VARIGRADE WP、オリエンタルのニューシーガル・セレクトVC-RP・ニューシーガル・セレクトVC-FBなどが市販されている。

## 【コントラスト可変型ペーパーに対する認識】

このタイプのペーパーを利用するに当たり、どのように認識したら良いのであろうか。その解答(認識)は、それを利用するユーザーの姿勢に依存すると言えよう。

即ち、ネガ・ポジ法による写真制作(調子のコントロール法)には2つの姿勢があるが、その一つは、写真制作者の多くが実践している「一般的な調子再現法」と言える方法で、ロールフィルム(特に、35mmフィルム)を利用する人に適した方法である。

この立場の制作者は、使用フィルム・処理剤・処理方法など自分の制作工程を確立し、撮影したフィルム(B&Wネガフィルム)を「標準ネガ現像」することで実践している。この方法で得られる「B&Wネガ」は、撮影した被写体のコントラスト(被写体の明暗比=被写体光域)に応じて「ネガのコントラスト」が変化(…コントラストの大きな被写体を撮影すると高コントラストに、コントラストの小さな被写体を撮影すると低コントラストに…)するため、撮影の状態ですべてに「ネガのコントラスト」が変動することになる。

それ故、コントラストの異なるネガからプリントして、「標準プリント」(ハイライト部からシャドウ部に亘り階調豊かに再現された写真とする)を生み出すためには、その受け皿となるペーパーの選択、すなわち、階調再現性の異なるペーパー(所謂、号数の異なるペーパー)が不可欠となる。

それ故、このような必要性を満たすため、感光材料メーカーは、同一銘柄のペーパーに号数の異なる数種のペーパーを用意して対応してきたが、今日では、コントラスト可変型ペーパーへの切り替えが進んでいる。この状況下では、号数別のペーパーを使用する場合には、ネガの調子に応じて数種のペーパーを用意する必要があるが、コントラスト可変型ペーパーならば一銘柄の製品を用意すれば良く、大凡のネガに適用できるというユーザーメリットがあ

る。その点では、メーカーとユーザーの思惑が妙に一致したとも言えよう。

しかし、やや言い過ぎとは思いますが、「ネガさえできれば何とかプリントできる便利な材料」という考えが生まれると、ネガ作りに対する思い入れ(?)が希薄化し、安易な方向に走り兼ねない一面を抱えており、写真作りに少なからず、問題を残すことになるのでは無いかと気宇する一人である。

ただ、コントラスト可変型のペーパーも写真材料の一つであり、それを取り扱う人の問題ではあるのですが!!!

もう一つは、「ゾーンシステム的な調子再現法」と言える姿勢である。

この方法は、シートフィルム利用者に適した方法であるが、ロールフィルムの場合でも基本精神を生かすことで、上述の「一般的な調子再現法」とは異なった価値観と写真制作姿勢を培う上で有効な方法と考えている。

ところで、シートフィルム利用者でも「一般的な調子再現法」を利用しているが、このゾーンシステム的思考を実践するならば、前述のような“ネガさえできれば何とかプリントできる便利な材料”的な姿勢を捨て、コントラスト可変型ペーパーを non Filter時の特性のペーパー(銘柄によって異なるが、号数別ペーパーの2号か3号程度に相当する)として意識することであると思う。この場合、フィルターの使用は、最後の手段と考える。

## I. コントラスト可変の仕組み

コントラスト可変型ペーパーは、どのような仕組みで製品化されているのであろうか。

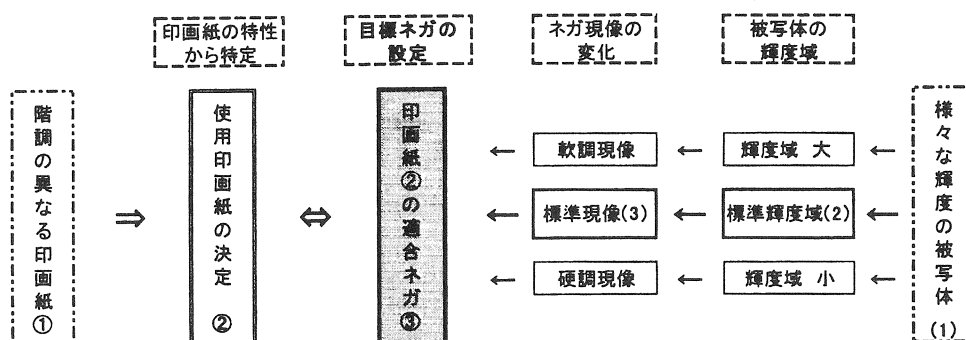
まず、写真乳剤は、製造過程では色々とコントラスト特性の異なる乳剤を製造することは可能であるが、一旦製品化された後では乳剤自体のコントラスト特性を変えることはできない。ただ、実用面では、画像化する過程で現像処理のコントロールによってコントラストを変えることが実践されているが、それもフィルムの場合に有効な手段ではあるものの、印画紙の場合には該当しないと考えた方が良いでしょう。

それでは、どのような考え方で、コントラストの変化を可能にしているのであろうか。

この可変方法の可能性を探ると、感色性(色に感ずる性質)の異なる乳剤で、しかもコントラスト再現の異なる乳剤(号数特性の異なる乳剤、すなわち、硬調乳剤と軟調乳剤)を用いて、次図のように、青感性の硬調乳剤と緑感性の軟調乳剤を二重塗布したペーパー構造とすることによってコントラスト可変型ペーパーとして機能させることができる。たとえば、このペーパーを non filter 状態で使用すると硬調乳剤と軟調乳剤のがミックスされた状態の画像となり、両乳剤の中間的コントラスト特性を持ったペーパーとして機能することになる。

また、濃い黄色フィルター(sy52のように520nmより長波長光を透過するフィルター)を用いると、緑感性の軟調乳剤のみが働き、軟調なペーパーとして

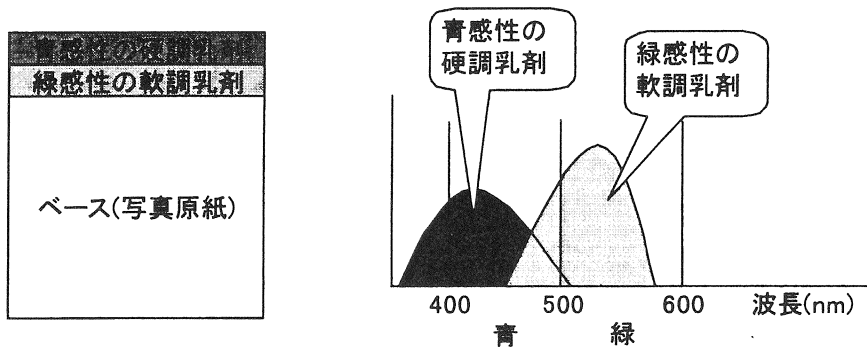
### ゾーンシステム考



利用できる。あるいは、青フィルターを使用すると、青感性の硬調乳剤のみが働き、硬調ペーパーとして利用できる。このように、フィルターの色を変えてプリントすることで、硬調乳剤と軟調乳剤の使用比

率が変化するので、コントラスト可変型ペーパーとして利用することができる。次回に続く  
 ※編集部から  
 2000 2/13に行われた田中先生の資料をレイアウトを変更し二回にわたり連載します。

コントラスト可変型ペーパーの構造(概念図)



ILFORD Multigrade の場合 (technical data より)

Figure 1. Sensitometric curves of the components to blue light.

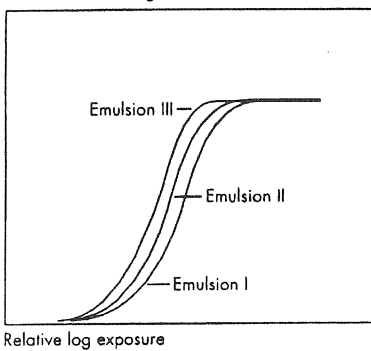


Figure 2. Combined sensitometric curve to blue-green light.

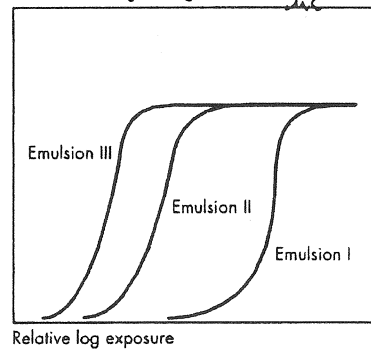


Figure 3. Combined sensitometric curve to blue light.

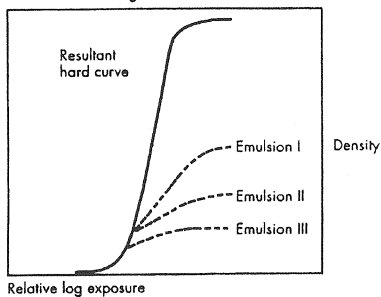
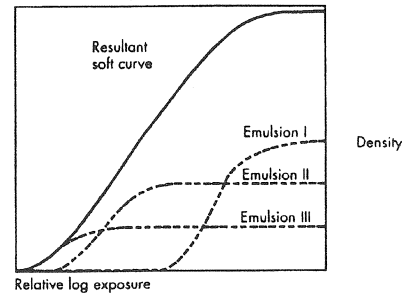


Figure 4. Combined sensitometric curve to blue-green light.



## 蛇腹修理雑感

中島秀雄

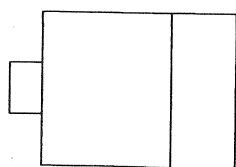
大型カメラにとって蛇腹はなくてはならないものである。蛇腹がいつ頃だれによって発見されたかは定かではないが、カメラの機構を考えると大きな発見だったに違いない。

写真が発明された1839年のダゲールのカメラを見ると、木製による外箱と内箱から出来ていて、それを縮めたり伸ばしたりして焦点合わせの出来る機構になっている。この機構だと外箱の大きさがカメラ全体の大きさとこれ以上小さくはならない。1860年頃の米国のカメラには前箱と後箱の間に蛇腹のようなものが着いていて、前箱も後箱も小さくなっていて収納によりコンパクト性を考慮したものになっている。61年には南北戦争が始まり、マーシュブライはこのカメラで南北戦争を撮影したものと思われる。

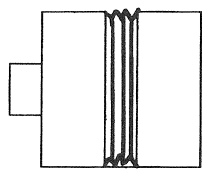
レンズから入った光が正確にフィルムに到達するには、外から光が入らない暗箱が必要で、内面反射もできるだけ押さえる工夫が必要になる。これがカメラ本体で、ここさえうまくクリヤーできればカメラはよりコンパクトになることは明らかだ。

ここに蛇腹が考えられた。蛇腹は光をさえぎり、あるときは伸び、あるときは縮み、またねじれ、歪み、雨や風ホコリさえ遮ってくれる。役目が終われば形状記憶よろしく元の形にきれいに折り込まれ、コンパクトに収納される。これほどの働き者にたまにはやさしくしてあげたいものである。

9月の終わりだというのに夜はまだ寝苦しい。昨日



1839年 ダゲレオ・タイプ



1860年頃・米国湿板写真カメラ

の和歌山ロケに使った4x5のカメラケースはまだそのまま部屋のすみであり、ケースの中は撮影でグシャグシャになったままだ。未撮のカラーフィルムもまだそのままで、早くホルダーから引き抜き、元箱に戻さなくてはいけない。20年以上使い込んだキズだらけのアルミニウムのカメラケースを開け、散乱したケースから4x5のビューカメラを取り出した。このリンホフカルダンカラー4x5はもう25年以上使っている。私が細江さんの助手時代に、銀一から中古の出ものを25万で買ったもので、ほんとうに使いやすいカメラだと思っている。リンホフデヒニカをモノレールに改装したデザインで、ファッション及びポートレート写真家を対象にデザインされたと聞いた。私はこれを建築写真、人物、工業写真に使い十分対応出来ている。しかしあるときリンホフデヒニカに誘惑され、このカルダンカラーを銀一のトレードボックスにあずけてしまった。しかし、新品のデヒニカをいざ仕事で使い始めたとき、機能面で強い不満を感じ、撮影現場から銀一に電話して多くのカメラがまだ売れていないことを確かめ引き上げたことがあった。そのときの売り値は35万になっていた。それ以来このカメラは二度と手放したくないカメラの一つになった。

ケースからカメラを取り出したとき、妙に蛇腹のゴミホコリの付着が気になった。近くにあったアルコールを柔らかいタオルに染み込ませこすってみた、油分やホコリゴミはきれいにとれ、たちまち新品の蛇腹に戻ったと思った。ところが蛇腹の折れ目の様子がおかしい、割れはじめたのだ。やな予感がして急いでアルコールを拭きとったが遅かった。割れ目が広がり、その下から黒い布が見えてきた。黒布が見えたのでまさか穴が開いているとは思わなかった。蛇腹の中にもホコリや汚れがあり中をのぞいたそのとき、真っ暗なはずの蛇腹は夜の星空のようになって穴だらけになっていた。Oh my God!! 翌日銀一に修理をたのんだが、交換の蛇腹はないし業者はその手の修理はもうやらないという冷たい返

事が帰ってきた。シェリロに電話しても、テヒニカの蛇腹が合うかもしれないがカメラが違うので業者はやらないだろう、テヒニカの蛇腹は8万という。そうだ関東カメラサービスへもっていけばやってくれるはずだと楽観していた。そこで思いきってカメラから蛇腹をはずすことにした。まず構造を十分確認してネジと接着部分をはがした。

それほど難しいことではなかったが組み立てるとき光漏れなく正確にいくか気になった。

サービスフロントへ蛇腹を差し出し、事情を話した。蛇腹をもって奥に引き返した女子事務員はしばらくして戻り「蛇腹の部品売りはうちではやらない、修理屋ですからカメラごともってきてください、修理は10万位いです」。同じカメラが銀一トレードボックスに10万で売っている。頭が混乱してきた、早く解決しないと仕事が入ったらどうしよう、レンタルで借りるか、木製のカメラを仕事にもっていくか。そのときカメラ雑誌シャッターバグが頭に浮かんだ、蛇腹修理のページがあったからだ。

インターネットで接続してみた。オーダー用紙に蛇腹のサイズを細かく書く欄があってこれならいけるとおもった。しかし、プリンターがないのでオーダー用紙がプリントアウト出来ない。たまたま用事があって近くに住む小部さんの家に行くことになり、プリントアウトしてもらうことにした。オーダー用紙はすぐに出てきた。しかし、小部さんは日本に蛇腹修理の専門会社があることを知っていた。茅ヶ崎に支店があり、住所を聞いたら三重県の伊賀上野町で忍者のふるさと、ここでの蛇腹製作には妙に納得

できた。さっそく蛇腹を発送し見積りを待った。その結果リンホフテヒニカの蛇腹が合うことがわかり、部品と修理で7万かかるって来た。リンホフカルダンカラー45はレンズ付近に皮製の小さな袋蛇腹が着いていて、これがワイドレンズから長玉までカバーしてくれて使いやすいカメラになっている。

今回袋蛇腹はそのままに穴の開いた蛇腹をはずし、新品の蛇腹の途中をナイフで切断して接合しなければならない少しやっかいな修理でもあった。そこで私は蛇腹だけ送ってもらうことにして、自分で修理することに決めた。袋蛇腹から穴の開いた蛇腹をはずすのは簡単だった。接合部分に光漏れ防止の工夫があるのかと思ったが何もなく、直接接合してあるだけだった。蛇腹のサイズをノギスで慎重に計測し、新しい蛇腹にナイフを入れた。皮革用の接着剤を付けて接合し、乾燥までクリップで押さえた。翌日光漏れの無いことを確認してカメラ本体に取り付け、フィルムの入ったホルダーをカメラに装填して日ざしに3時間ほどさらし、光漏れテストを行った。結果は完璧だった。何も問題はなかった。

驚いたことに、レンズ側の未修理部分の蛇腹にも小さな穴があり、3時間の強い光線の中でも光り漏れはなかったことである。蛇腹の谷山の折れ部分に穴があってもフィルムには影響ないという発見でもあり、改めて蛇腹効果の大きさに驚いた。以前8x10カメラを借りて撮影したとき時々光漏れがあつて、その原因がわからなかったが蛇腹を疑うことはまったくなかった。

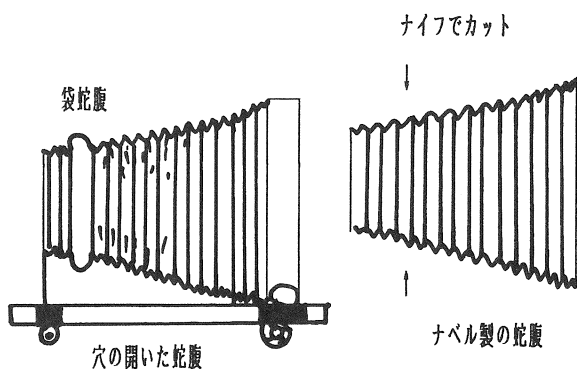
蛇腹の掃除は、お場にぬらしたタオルをよく絞って拭くのがよいと後で修理やに聞いた。ときには蛇腹の中に顔を突っ込んで穴の確認も怠りなく。

基本的にどんなサイズの蛇腹も作るということです。クラシックカメラをお持ちの会員は蛇腹カメラが多いようです。お困りの方はTelしてみてもいいかでしょうか。

<株> ナベル

〒 518 - 0873 三重県上野市丸之内 181-13

Tel 0595 - 21 - 5060 Fax 0595 - 23 - 5059



# 連載

## ゾーンシステム・テクニカルアドバイス

中島秀雄

### フレーミング

中島秀雄

写真の展示には様々な方法がある。プリントをそのまま壁面にピンで止めたり、天井からワイヤーで吊ったり、またアクリル板にサンドイッチして展示したのを見たことがある。それぞれの目的、内容に合わせた見せ方で効果的な方法を考える必要がある。

プリントそのものの美しさを見せるという我々の方法は、フレームもシンプルなものを選びたい。

#### フレームの材質

フレームの材質には、木材と金属がある。木材のフレームにはオーク、チーク、クルミ、カエデなどがあり、同じ材質でも色見や木目に多少の違いがあって楽しみの一つといえる。硬質で変形もなく、耐防虫、耐腐食性もあり、プリントの色調や作品の内容に合えばその装飾性は大きく、展示効果を高める。しかし、フレームの製造過程で使われる接着材やホルマリン処理されたもの、また塗装にもプリントにとって不適切なものがあり注意が必要だ。日本で行われた米国フレンズによるアンセル・アダムス展のフレームは木製だった。この展覧会は米国を長期に渡って巡回し、日本にやってきた。

写真用に作られた木製のフレームの安全性は確認できているものと思われる。

木製フレームのやっかいな点は、使用後解体することはできないということだ。次の展覧会に同じフレームを使うかどうかわからないまま、とりあえず四角く組まれた状態で収納するしかなく、それなりのスペースが必要になる。

\*ライト・インプレッションズ木製フレーム色見メイプル、ブラック、チャコールの3色、ナチュラル・オイルとワックス仕上げになっている。

\*サイズ：8x10, 11x14, 16x20, 20x24

\*フレームはレンタルすることも出来る。

\*フレンズ：フレンズ・オブ・フォトグラフィーの略

金属フレームはアルミニウムとステンレス製がある。コストの点や加工の面でアルミニウム製がよい。色も豊富で、シンプルに加工されたデザインがプリントにはよく合う。米国ニールセンのアルミフレームは堅牢な加工とシンプルなデザインで、バリエーションも豊富。その中から自分のプリントに合うものを捜すのも楽しいものだ。フレームを止める四隅の金具が実にシンプルで確実なのがいい。これを真似した国産のフレームもあるが、止め金も不器用で値段も高い。

アルミのフレームは組み立ても簡単で、使用後解体して収納できる。

\*ニールセンのフレームにはカラーのバリエーションも豊富で、シルバー、ホワイト、ブラックはもちろんのことブルー、グリーン、イエロー、レッドそしてゴールドも用意されている。

#### フレームに組み込むガラスとアクリル

透明のガラスは平面性があり、ガラスの光沢がプリントに深みを与えるように感じ、この点では好ましい。しかし、反射も強くプリントを見づらいものにしてしまうこともある。またガラスの重みがフレームに影響することもあり、割れたりするとプリントにダメージを与えてしまう。反射を抑えたコーティングガラスもあるが、グリーンの色見が強く値段も高い。コーティングガラスは撮影レンズにコーティング加工があつて光の透過をよくするように、平面ガラスにコーティングしたもの。コーティングガラスの反射率は1%未満、普通ガラスは8%。

アクリルは透明度が高く、プリントのテクスチャに影響を与えないように感じる。またガラスにくらべてはるかに軽く、フレームに負担をかけないが、平面性に問題があり、その反射がプリントをわずか見ずらくしてしまう。また静電気によってゴミ、ホコリの付着もあり、扱いに注意しないとキズがついてしまう。

\*ガラスとアクリルには長所欠点があり、どちらを使うかまようところ。私はガラスの平面性が好きで長年ガラスを使って来た。前回の個展ではアクリルをレンタルして使ってみた。個展のように一人で作業するとき、アクリルの軽さは大変便利である。評価は半々だった。コストはガラスもアクリルも大きな違いはなくなってきた。

### バックボード

フレームの蓋の役割をするもので、ブックマットを均一に押さえ平面性を保つ役目をする。私は最近ポリプロピレンで出来ているコルゲートシートを使っている。軽くて強く、加工も容易で様々な色見がある。グレー、ホワイト、ブラックが無難な色だろう。ポリプロピレンはマットボードにもプリントに対しても問題のない材質だ。また中性の紙で出来たコルゲートボードもバックボードとして市販されている。粗悪なベニヤ板やエンピ系のペンキで塗られた板を使えば、ブックマットやプリントを汚染してしまう。中性紙のバックボードが手に入らず、しかも短期間であるなら、2プライの中性紙をブックマットのあいだに入れてベニヤ板を使うことも出来るが、あまり奨めない。

\*コルゲートシートは5m/m程の厚みがあり、間に波型の材質が挟まれている。

\*コルゲートボードは中性紙で出来ていて、厚みは6m/m くらいあり間に波型の中性紙が挟ま

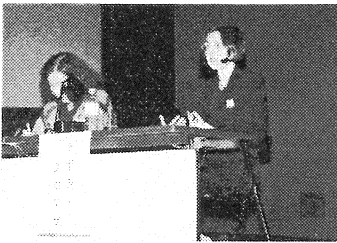
## 講演会報告

### —アンセル・アダムス：芸術家、そして推進者として—

フレンズ・オブ・フォトグラフィー  
館長デボラ・クロチコ氏

荒井 崇

1999年11月23日、川崎市市民ミュージアムにて、フレンズ・オブ・フォトグラフィー館長デボラ・クロチコ氏の講演が開催された。



デボラ・クロチコ氏、及びフレンズ・オブ・フォトグラフィーについては、会報 vol. 14 中島先生の記事において詳細が記されているので、参照していただきたい。

今回は、アダムスの生い立ちから、写真家／創作者／出版者／教師／評論家／自然保護運動家というさまざまな偉業を成し遂げるまでのエピソードが話の中心だ。

少年の頃、両親と旅行に行ったヨセミテが最初の撮影体験。ハーフドームを撮影しようと切り株の上に立ち、足を踏み外して落ちてしまうのであるが、体勢はくずしながらもシャッターはしっかり切っていたという。その映像創作への執念には天性のものがあつたのかもしれない。

その後、シエラクラブというハイキングクラブの案内人をしながら、ヨセミテ及びその周辺の自然をこよなく愛する写真家となっていく。とりわけ自然環境保護には執拗なほど執念を燃やしていたらしい。レーガン政権時、内務長官だったジェームス・ワットの環境政策には猛反対していたそうだ。常々、ワットの似顔絵を書いたバドミントンのようなラケットで、ボールをたたいていたという。ワットが

内務長官を辞めた時は、祝勝パーティーを開催したという逸話さえあるそうだ。

また、アメリカで日産（現地ではダットサン）のコマーシャルに、アダムスは写真を提供したことがある。なぜ、よりによって環境を犯す自動車のコマーシャルに、という質問に対する答えは、“小型で燃費のよい車を作ったから”だそうだ。

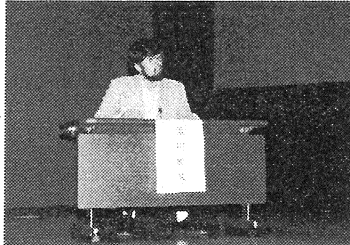
アダムスは、“環境保護に写真芸術を使ったことはない。ただ、役に立ったときはうれしい”と常々言っていたという。

しかし環境保護の一方で、アダムスの写真が有名になればなるほど、多くの人が国立公園に集まり、環境破壊を進めてしまうという皮肉なできごとがあつたことも否定できないそうだ。現実の非常な矛盾を感じてしまう事実である。

当初アダムスは音楽家を目指していて、“ネガは楽譜、プリントは演奏”という有名な言葉を残しているが、今回のスライドには度肝をぬかされた。

ヘルナンデスの月の、ストレートプリントと最終プリントを同時上映したのである。ストレートプリントは、空が薄いグレーであり、最終プリントには現われない上部の雲が映っている平凡な風景写真。あんなプリントでは100ドルの値も付かなかつたのではないだろうか。やはり偉大な作曲家（カメラマン）であり、偉大な演奏家（プリンター）でもあるのだ。

日本人にはあまり知られていないが、アダムスと日本との関係は、意外にも深いものがあるそうだ。代表的な事実としては、第二次大戦時のカリフォルニア・マンザナー日系人収容所における写真撮影である。アダムスの写真は、一般市民と変わりなく楽しく生活している日本人の生活を表現しているという。彼は、“マンザナーの自然が、日系人を安らかに生活させている。”と思っていたようである。有名なウィリアムソン山の写真は、この収容所を背にして撮影されたものだそうだ。ただ、アダムスが支援した、収容所在住日系人写真家、宮武東洋が撮影した刑務所の



ような収容所の写真と対比させると、何とも言いようのない眼差しの違いを感じてしまうという。

私は、アダムス家部屋の映像で、日本製と思われる桐のたんすが写っていたのをふと思い出した。

アダムスの、写真文化を広げる活動は広範囲だそうである。ニューヨーク近代美術館への写真部門設立、フレンズ・オブ・フォトグラフィー設立、などが代表的な例であるが、アート・インスティテュートでの講師をしたり、さまざまなワークショップを行っている。マイナー・ホワイトが写真の教本を出したときは、教本の付録として自分のオリジナルプリントを提供したとのこと。熱心な写真教育への姿勢が感じられる。

アダムスの教育理念は、“写真を芸術として全ての人にアクセスできるようにしたい。”だそう。この言葉に表れているように、アダムスは分け隔て無くどんな人にも、自分の技術、表現を教えたという。有名な作家を育てる意図はなく、むしろ有名な人より、多くの無名な人に写真を教えたかったようだ。表現に関しては寛容であり、自分と違った作風も受け入れて教育したらしい。

“新しい技術に恩恵を受け、過去を尊重し、全てを包み込んでいかねばならない。”これもアダムスの代表的な言葉だそうである。

最後に、デボラ・クロチコ氏の運営するフレンズ・オブ・フォトグラフィーについての話があった。フレンズ・オブ・フォトグラフィーの事務所兼ギャラリーは、1987年にカーメルからサンフランシスコに移転、現在に至る。なお、近日中に新事務所兼ギャラリーが完成し、引越しをするそうである。ちなみに場所は、現在地から数ブロック離れた位置とのこと。

私は、現事務所兼ギャラリーを3年前に訪れたことがあるが、たまたま開催されていた写真展は、医学をモチーフにした作家の作品で、衝撃を受けた記憶がある。

日本写真界の現状といえば、荒木さん風の私写真、ヒロミックス風のセルフヌード、森山さん風のアレ写真、時代のはやりスタイルのみ認められる。たいくつな日本写真界では絶対に生まれない表現であった。フレンズ・オブ・フォトグラフィーは、ギャラリー経営の他、写真関連書籍の出版、販売、ワークショップ等の活動を行っていて、基本的には、視覚芸術としての写真を多様な分野で広めているとのこと。学校などへの出張ワークショップも行っているそうだ。出版に関しては近々、f 64に関する本が出るという。どうぞ期待。

講演が終わった後は、川崎市市民ミュージアム学芸員、深川さん司会による質疑応答。

質問の中で、美術館展示に関するものがあった。照明に関しては、保存のためライトの照度を落としていたそうだが、アダムス本人は、もっと明るい照明を望んでいたらしい。鑑賞か保存か、これは学芸員を悩ます一番の問題なのであろう。更にデボラ・クロチコ氏は、同じ作家の作品であっても、展示方法、場所で印象が大きく異なることを強調していた。アダムスの作品も、異なるさまざまな美術館で鑑賞してみたいそうである。

短く感じた講演であったが、“われわれ研究会も、アダムスの理念を継承し、写真文化向上の一翼を担うことができるようがんばらねば。”と強く感じさせられた2時間であった。

---

## Information

---

### ヨセミテ公園撮影ツアー参加者決定

今回のヨセミテ撮影会参加者は以下の5人です。  
松本さん、古川さん、木下さん、山下さん、中島先生  
航空券、レンタカー、ロッジの予約、ルートの決定  
全て完了  
6/1 出発  
6/7 帰国  
今からおみやげ話が楽しみです。

---

### 【訃報】

会員の吉野光次郎さんが5/3に永眠されました。  
心よりお悔やみ申し上げます。

### <原稿募集>

会員の皆様からの原稿・情報を常時お待ちしております。

#### 原稿送付方法

フロッピー・MOは、Mac、Windowsどちらのフォーマットでも可。圧縮無しのテキストファイルで。メールも同じ。

手書き原稿はタイピングの必要があるので原則受け付けません。100文字程度の雑文は可。  
できれば、プリントアウトが嬉しいです。写真はネガ・ポジ・プリントいずれも可。

(篠原)